

Freshers' English での学習者オートノミー育成を目指した取り組み
—英語学習の目標設定と学習計画—

A Report on the Development of Learner Autonomy in Freshers' English:
Personal Goal Setting and Learning Plans for English Language Learning

林 千賀

成蹊大学一般研究報告 第51巻第3分冊

平成30年7月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol. 51 No. 3

July, 2018

Freshers' Englishでの学習者オートノミー育成を目指した取り組み —英語学習の目標設定と学習計画—

A Report on the Development of Learner Autonomy in Freshers' English:
Personal Goal Setting and Learning Plans for English Language Learning

林 千賀

Chika HAYASHI

1. はじめに

本学の全学英語共通カリキュラムでは1年次の必修科目として、2014年度より1年次前期にFreshers' English (FE) を開講している。¹ FEはいわゆる英語4技能のスキルの向上やストラテジーの習得を目指す授業とは異なり、学習者が主体的かつ計画的に英語学習に取り組む姿勢とスキルを身につけることを目的に、これまでの自身の英語学習方法を振り返りながら、英語との付き合い方やさまざまな英語学習方法の実践を通して、学習者オートノミー育成を目指した科目である。そして「多読」、「e-learning学習」、「英語学習の目標設定と学習計画」の3つを共通活動として位置づけ、指定教材を用いた授業も一部盛り込むことで授業内容の統一化も図っている。² 筆者は2017年度前期に初めてFEを担当し、協働を核とした学習者オートノミー育成の実践を試みた。そこで本稿では、英語学習の目標設定と学習計画に焦点を当て、本授業での学習者オートノミー育成を目指したアクションリサーチに関して報告する。

2. Freshers' Englishの授業概要

まず図1は、全学共通シラバスの「テーマ・概要」欄に記載されたFreshers' Englishの授業概要である。

Chika Hayashi: A Report on the Development of Learner Autonomy in Freshers' English: Personal Goal Setting and Learning Plans for English Language Learning

- 1 同科目は文学部英米文学科でも提供しているが内容が異なるため、本稿で扱うFreshers' Englishは英米文学科以外の経済・理工・文・法各学部全学科の学生を対象にした授業を指す。
- 2 2017年度は英語科目部会の委員を中心に、パソコン教室にて学部学科の枠を超えた合同授業を前期第2週目に行い、成蹊大学の英語科目概説やe-learningの活用方法に関するオリエンテーションを実施した。企画・準備の段階から、教務部および高等教育開発・支援センターの職員各位には、多大なご尽力を賜った。改めて御礼申し上げる。オリエンテーションの詳細は、以下のURLを参照。<http://new.seikei.ac.jp/university/topics/20170501-4472.html>

このコースでは、英語を学ぶ目的や英語で何が達成できるかといった動機づけを意識し、自律した学習者となるための基本的スキルの習得を目指します。具体的には、

- 1) 大学4年間や卒業後を見据えて、自ら主体的・計画的に英語学習に取り組む姿勢とスキルを身につけるのがねらいです。問題集を解くような英語学習ではなく、より幅広く実践的な英語学習法に触れて、自分に合った学習法について考えます。特にe-learningや多読に取り組み、自学自習のすべを習得しましょう。
- 2) 英語にかかわる言語・社会文化的基礎知識を多角的な視点から学んで、なぜ英語を学ぶのか、英語を学ぶとどのような世界や可能性が広がるのか、英語を学ぶ意義と楽しさを再確認しましょう。

図1 Freshers' English 授業概要 (2017年度シラバスより抜粋)

シラバスに明記されている通り、本授業ではさまざまな英語学習方法に触れ、学生一人ひとりが自分に適した学習方法を見つけ、自学自習のすべを習得することが目標の一つである。さらに、これまでの受験偏重の考え方や受験を意識した英語学習方法から離れ、英語を学ぶ意義について改めて考えることで英語を学んだその先にあるものを考え見つけることも目標とされている。そして、その実現のために必要な基本的なスキルを習得しながら、個々の学生が英語学習の目標設定と学習計画を行い、自律した学習者になることを目指している。

3. 学習者オートノミー

英語教育の分野でも学習者オートノミーに関する研究は数多くあるが、小嶋 (2007) は学習者オートノミーを以下のように定義している。

学習者が発達段階に応じて自分の言語学習に責任を持ち、学習内容・方法の決定およびプロセスにできるだけ積極的に関わり、学習効果を自ら反省・評価しながら、自分の言語学習を主体的に持続・発展させようとする意欲・能力。学習者が社会的責任を果たしながら生きていく存在として他者と協働できるように、共通の目的・目標の達成を体感しながら個人の自律を育むことが必要である。(p. 176)

この定義によると、オートノミーには個人差があり、同じ学習者であっても発達段階に応じてオートノミーのレベルが異なるとされる。そしてオートノミーには個人的また心理的な側面に加えて、社会的な側面も含まれ、学習者同士の学び合いを通じた学習者オートノミー育成の必要を指摘している。この定義はまさに筆者の理念と合致するものであり、本授業でもクラス内での学生と教員および学生同士の協働を通じた学習者オートノミーの育成を試みた。

4. 日本における学習者オートノミー育成の問題点

近年、さまざまな分野でも学習者オートノミーの必要性が主張されているが、ペニン
トン (2011) は外国語学習における学習者オートノミー育成の問題点を5つ挙げている。

- 1) 学習者に効果的な学習方法に関する知識が十分でない
- 2) 学習過程の理解が不十分であるため、具体的で段階的な目標設定ができない
- 3) 外国語学習を行っても、その到達度を客観的に把握することができない
- 4) 学習を継続させることが難しい
- 5) EFL (English as a Foreign Language) の環境では英語使用の機会が限られている

1点目に関しては、一般的に大学入試合格が高校までの英語学習の大きな目標であるため、多くの学生は受験勉強に特化した効果的な学習方法を身につけてきたと考えられる。無論、これは英語科目だけに限ったことではないが、大学に入学して間もない学生が、大学受験対策以外の英語学習方法について学び、実践する機会が高校卒業までの間に十分にあったとは言い難いであろう。

2点目の学習の目標設定についても、筆者のこれまでの指導経験を振り返ると、新入生に英語学習の目標を立てさせると「英語がペラペラになりたい」など曖昧なものであることが多い。また、学生の掲げる目標と実際の英語力との間に乖離があるケースも散見されるため、長期・短期など段階的な目標設定を行い、より現実的な目標に落とし込む必要性を感じている。

3点目の到達度の把握については、特に英語学習を継続している学生が該当すると思われる。一例として、各種英語資格試験を受検することで、自分の到達度や進捗状況を客観的に把握することは可能であるが、学生が向上を望む特定のスキルになると、その知識はほとんど持ち合わせていないようである。しかしながら、自分の到達度を定期的に確認することで自分の進捗状況だけでなく弱点も併せて把握することができるため、その後の学習のモチベーション向上や学習目標および学習計画の修正にも深く結びつき重要であると考えられる。

4点目に関しては常日頃から感じることであるが、継続学習の重要性については理解していても、なかなか実践に移せない学生が多く見受けられる。内発的動機付けの高い学習者は自ら進んで学習に取り組むことができるが、反対に外発的動機付けの方が強い場合、学習を開始したとしてもやる気を持続できず途中で挫折してしまうことが多い。そのため、教員やクラスメイトとの対話や協働を通して、クラス全体でモチベーションを維持・向上させながら学習継続できるような関係作りや環境作りが功を奏することも多々あるように思われる。

また5点目については、日本のようなEFLの環境では英語使用の機会を意識して設けない限り、英語に触れる機会が少ないのが現状である。特にこれはスピーキング力の向

上を目指す多くの学生が直面する問題の一つと考えられるが、さまざまな外的要因や制約のある環境も考慮に入れた上で、効果的で実現可能な学習方法を提示することが教員には求められているのではないだろうか。

本実践では学習者オートノミー育成に係るこれらの問題点を念頭に置きながら、学生一人ひとりが自分に適した学習方法を見つけながら、学習目標の設定や学習計画を立てられるような指導を行った。

5. 対象クラス

2017年度前期に筆者が担当したFreshers' Englishの法学部の2クラスを対象とした。クラスⅠは20名（男：12名、女：8名）、クラスⅡは26名（男：16名、女：10名）で、両クラスともに入学時のTOEIC-IPのスコアに基づき習熟度別のクラス編成がなされ、それぞれTOEIC 300台とTOEIC 400台（100点刻み）である。

6. 授業内容

図2は授業計画である。全15回の内、計7回（第1回、2回、3回、4回、5回、8回、15回）の授業を英語学習の目標設定と学習計画の活動にあてた（下線部が該当する活動である。）³

回	授業内容
1	オリエンテーション・ <u>これまでの自分の英語学習の振り返り(1)</u>
2	合同授業（成蹊大学の英語科目概説・E-learningの活用方法）・ <u>これまでの自分の英語学習の振り返り(2)</u>
3	英語学習計画を立ててみよう(1): <u>自分の英語学習スタイルの確認・学習方法の提案</u>
4	英語学習計画を立ててみよう(2): <u>英語学習目標の設定と学習計画の共有</u> ／「成蹊多読」の導入
5	「成蹊多読」にチャレンジ： <u>英語学習の振り返り・修正</u>
6	「成蹊多読」にチャレンジ
7	英文のフォーマルメールを書いてみよう
8	オンライン教材を用いた英語学習法・ <u>学習計画の中間報告</u>
9	映画を用いた英語学習法
10	留学について考えてみよう(1)： <u>メリットとデメリットは？</u>
11	留学について考えてみよう(2)： <u>留学経験者（卒業生）のお話</u>
12	プレゼンテーションにチャレンジ： <u>良いプレゼンテーションとは？</u>
13	ミニプレゼンテーション(1)：Show and Tell（自分の好きなもの）
14	ミニプレゼンテーション(2)：Show and Tell（自分の好きなもの）
15	英語学習計画の振り返り・修正（ <u>後期の英語授業の紹介</u> ）

図2 授業計画

3 シラバスに明記している7回の授業の他、個々の学生に対して教員からのフィードバックなども適宜行った。

7. 手順と結果

英語学習の目標設定と学習計画に関する各回の授業内容と手順を具体的に説明する。併せて、当該授業を履修していた2名の学生（Aくん、Bさん）が、どのように自身の学習目標を設定し学習計画を立てたのか、その過程を追いながら分析を試みる。

【第1回目】これまでの自分の英語学習の振り返り（1）

まず初回授業で、以下の5つの質問を記したワークシートを配布した（巻末の付録ワークシート（1）参照）。

- (1-1) 英語学習歴
- (1-2) 海外渡航歴
- (1-3) これまでの英語学習方法
- (1-4) 英語を動物に例えると何ですか？その理由も教えてください。
- (1-5) 英語を使ってどのようなことをしてみたいですか？

(1-1)英語学習歴と(1-2)海外渡航歴以外は全て自由記述回答の項目である。まず(1-3)「これまでの英語学習方法」では、大学入学前までの自身の学習方法を省察させ、これまでどのように英語と向き合ってきたのか、授業内外での英語学習を改めて振り返らせることで、英語学習に纏わる楽しい経験・成功体験や辛く苦い思い出も含めた自分の英語学習経験を明らかにさせた。

(1-4)「英語を動物に例えると何ですか？」は、英語に対するイメージを把握する目的で加えた。⁴そして、文字や絵で自由に表現されたそれぞれの動物の意味を、Di Leo (1970) および Machover (1949) を参考に分析した。学生が表現するものは動物以外にも想像上の生き物も含まれ、言葉には表出されない学生の潜在的な心理などを理解する手助けとなった。

(1-5)は長期目標にも関連した項目であるが、筆者のこれまでの経験を振り返ると、学習目標を立てるよう促しても戸惑い考え込んでしまう学生が多いため、敢えて「目標」という言葉を使わずに、「英語を使ってどのようなことをしてみたいか」という質問を投げかけることで、英語を身近なものとして捉えさせた後で目標設定と結び付けることにした。また、この質問に答えようとすることは、「第2言語を使用した理想的な自身(L2 Ideal Self)」(Dornyei and Ushioda, 2009)をイメージする機会にもなり、主体が自分自身であることを学生に意識させることで自己関与感を高め、その結果、「目標」を立

4 調査手段として絵を用いた研究では、描かれた絵の内容だけでなくその位置なども分析の対象とし、言葉だけではまだ十分に自分の考えや感情を表現することの難しい子供の認識や理解を明らかにしている。最近では年齢や言語の発達段階に関係なく、多くの研究で絵が用いられている (Borg, Birello, Civera, & Zanatta, 2014; Kalaja, Dufva & Alanen, 2013)。

てるという行為自体に楽しく取り組めるようになり、またそれに付随して今後の英語学習の強い動機付けになることも期待した。⁵

【第2回目】これまでの自分の英語学習の振り返り（2）

第2回目の授業では、第1回目で記入させたワークシート（1）内の（1-5）「英語を使ってどんなことをしてみたいですか？」の回答内容に関連した、以下の4つの質問を記したワークシートを配布した（ワークシート（2）参照）。

- （2-1）（1-5）に関して、そう思うようになったきっかけや出来事などがありますか？
- （2-2） そうなるためには、どのようなことが必要になると思いますか？
- （2-3） その実現に向けて、現在行っていることはありますか？
- （2-4） その実現に向けて、やり始めようとしていることはありますか？

これらの質問に回答させることで、学生には自分の目標設定の背景にある理由や経験を改めて振り返らせ内省を促した。また、目標達成に必要なものや現在そして今後の学習予定も併せて尋ね、英語と自分自身の関係について深く考えさせることで、非現実的で形だけの目標設定にならないよう留意した。本実践で学生が目標を立てるプロセスを筆者が観察した結果、やはり適切な目標を立てるためには、教員の足場かけが必要であり、しかもそれは段階的かつ対話的なものであるべきだと感じた。特に授業開始直後の数週間でやるこれらの一連の対話形式のやりとりは、その後の協働的な取り組みの基盤になるため、個々の学生との信頼関係を早い段階で築きながら、学生の主体性を高めることができたように思う。

ここで、2名の学生（Aくん、Bさん）の第1回目と第2回目の記入内容をみていく。表1は、第1回目と第2回目の授業時に配布したワークシート（1）と（2）のそれぞれの記入内容をまとめたものである。

5 「第2言語を使用した理想的な自身」と外国語学習の強い動機付けの関係については、日本人学習者を対象にした研究でも実証されている（中田、2016）。

表1 ワークシートの記入内容

	質問内容	Aくん (クラスⅠ)	Bさん (クラスⅡ)
1-1	英語学習歴	6年	6年
1-2	海外渡航歴	なし	修学旅行でシンガポールに3泊4日
1-3	これまでの英語学習方法	問題集をやりました。	ひたすら書いて学習
1-4	英語を動物に例えると何か。(理由も)	ネズミ。動きが速くてよめないから(読めないから)。	ネコ。なれる(話せるようになる)と楽しいけど、それまでが大変でたまに離れたくなるから。
1-5	英語を使ってやってみたいこと	外国人と友達になりたい。	海外のお友達をたくさん作りたい。接客を英語のできるのもかっこいいのでしてみたい。
2-1	(1-5) そう思うようになったきっかけや出来事	世界旅行をしたい。できれば一人で。自分の価値観を広げたい。	京都へ旅行に行った時、外国人観光客に英語で話し掛けられ、すらっと返事が返せなかった。しかし、京都のお店で働いている人はペラペラでかっこよかったので。
2-2	(1-5) そうなるために必要なこと	ある程度、会話ができる英語力が必要。	毎日、英語に接すること。英語を好きになること。
2-3	(1-5) その実現に向けて現在行っていること	受験期にやった問題集や単語を見直す。映画を英語で観る。	なし
2-4	(1-5) その実現に向けてやり始めようとしていること	なし	なし

まずAくんは(1-4)で英語をネズミにたとえ、Aくん自身が「できないこと」をその理由に挙げ、英語に対する苦手意識が示されている一方で、(1-5)では英語を使って「外国人と友達になりたい」と回答し、英語をコミュニケーションの手段として捉え、英語に対するポジティブな側面も伺える。また(1-5)の回答に対する深掘りの質問(2-1)では、「世界旅行をしたい。できれば一人で。自分の価値観を広げたい」と述べ、英語でのコミュニケーションを通して身につけたいことが明確であり、そのために(2-2)「ある程度、会話ができる英語力が必要」であることを自覚し、(2-3)では現在、「問題集や映画を用いて学習を行っている」と答え、高い学習意欲が感じられる。⁶

一方Bさんは、英語を猫に例え、英語を話せるようになることの楽しさだけでなく、そうできるようになるまでの難しさについても言及している。またAくん同様、Bさん

6 (2-1)のきっかけや出来事に関するAくんの記入内容はいずれも、Aくん自身が思い描く未来の自分の姿や経験である。一方、Bさんは自身が経験した過去の出来事が起因していると述べ、両者間の記入内容に明らかな相違が見られる。英語への苦手意識と関係しているためか、Aくんが過去の経験には一切触れず、未来を展望しながら英語と自分自身の関係を考えていることは特筆すべき点である。

も (1-5) で英語を使って「海外のお友だちをたくさん作りたい。接客を英語でできるのもかっこいいのでしてみたい」と具体的に述べ、「第2言語を使用した理想的な自身」をイメージできている。そして、そのきっかけについては、(2-1) に示されている通り、外国人観光客に突然話しかけられたが英語で上手く返答できなかった歯痒さや悔しさが挙げられている。それと同時に、たまたまその時に見かけた流暢な英語で対応している店員さんが、Bさんにとってのロールモデルや憧れの対象であることが伺え、Bさんの英語に対する意識やモチベーションの高さが顕著に認められる。しかしながら、英語学習に関して現在は特に何も行っておらず、また行こう予定もその時点ではないと回答している。

【第3回目- (1)】英語学習スタイルに関するアンケート調査

第3回目の授業では、自己検査方式のアンケートの一つであるC.I.T.E. Learning Styles Inventoryを用いて個々の学生の学習スタイルの確認を行った。学習スタイルには数多くの種類があるが、このアンケートでは7種類の学習スタイルを扱い、視覚系 (Visual-Language, Visual-Numerical)、聴覚系 (Auditory-Language, Auditory-Numerical)、触覚・運動感覚系 (Tactile-Kinesthetic)、個人 (Social-Individual)、グループ (Social-Group)、口頭 (Expressive-Oral)、筆記 (Expressive-Written) に関する全45個の質問項目から成る。但し、本実践では視覚系および聴覚系の数字 (Numerical) に関しては特に扱わなかった。

各学習スタイルをみると、視覚系は本を読んだり情報を目で見ることで理解し、聴覚系は聞いたり話した内容をよく覚えていることができるのが特徴である。触覚・運動感覚系は新しいことを体験し、実際に自分でやることで学習するタイプである。個人とグループは文字通りそれぞれ、学習をする際に、ひとりもしくは複数で行うかの違いである。口頭はスピーチなどの方が自分の意見を流暢にまた明確に表現でき、筆記はレポートなどの方が自分の意見を上手にまとめられ、よりの確に伝えられる学習スタイルを指す。アンケート結果の数値により各学習スタイルは3つに分類され、Major Learning Styleはより好んで用いられる学習スタイル、Minor Learning Styleはほとんど用いられない、もしくは他の学習スタイルと組み合わせて用いられるもの、Negligibleは全く用いられないものである。

アンケート項目は全て英語で書かれているため、学生が各項目の意味を正しく理解して回答できるよう、日本語でも補足説明を行った。全学生が回答し終わった後で、その結果をワークシートに記入させた (ワークシート (3) 参照)。その後で教員がそれぞれの学習スタイルを解説し、学生には自分の認識と実態の関係について考えさせ、ワークシートの一番下のリフレクションの項目 (「アンケート結果は、実際の自分の学習スタイルと合致しているでしょうか?」) に答えさせた。そして、3人1組のグループに分かれて類似点や相違点を確認させた。

【第3回目－(2)】英語学習スタイルに適した学習方法の提案

次に、グループ毎に7種類の学習スタイルそれぞれに合った学習方法を考えさせた。外国語学習における学習者オートノミー育成の問題点の一つ目にも挙げられていた通り、当該クラスの学生たちも効果的な学習方法に関する知識が十分でないと思われたので、学生にはこれまでに試したことのある学習方法を共有させ、それがどの学習スタイルに該当するか考えるよう伝えた。また話し合いの内容をクラス全体でも共有させるため、各グループに1台ずつホワイトボードを渡し自由に記入させた。表2は学生たちが考えた学習方法をまとめたものである。

表2 学習スタイル別学習方法

学習スタイル	クラスⅠ	クラスⅡ
視覚系	<ul style="list-style-type: none"> 英語の映画を字幕付きで観る。 単語帳を作る。(音読) 英語の曲を聴きつつ、日本語の歌詞カードを読む。 	<ul style="list-style-type: none"> 単語帳をみて暗記する。 ひたすら見る回数を増やす。 トイレのドアに貼る。 英字新聞を読む。
聴覚系	<ul style="list-style-type: none"> 英語のCDを聴く。 	<ul style="list-style-type: none"> CDを聴く。 アプリを使う。 洋楽を聴く。
触覚・運動感覚系	<ul style="list-style-type: none"> 留学や海外旅行に行つて、現地で体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の行動を英語に結び付ける。
個人	<ul style="list-style-type: none"> 昨日の自分より知識量が増えているか、テストする。 	<ul style="list-style-type: none"> 図書館の個人学習室にこもる。
グループ	<ul style="list-style-type: none"> 得意な人を見つけて、一緒に問題を解いたり、教えてもらったりする。 	(なし)
口頭	<ul style="list-style-type: none"> 多読 	<ul style="list-style-type: none"> 外国人と喋る。 音読練習。 シャドーイング
筆記	<ul style="list-style-type: none"> 本を読み、学んだ表現を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 発音しながら書く。 英語で日記を書いてみる。

クラス毎にみていくと、クラスⅠでは全学習方法に関して学生が適していると考えられるものが挙げられているが、口頭の学習スタイルとして多読が記されている。多読はリーディングの学習方法の一つであるため、その学習効果と学習スタイルの関係性について誤認している可能性が示されている。一方クラスⅡでは、グループ学習以外の全学習スタイルに対して具体的な学習方法が挙げられ、クラスⅠよりもその内容が明確で具体的である。しかしながら、この活動の主な目的はアイデアの共有であったため、この時点では教員からの誤りの指摘やアドバイスなどは一切行わなかった。

【第4回目】英語学習目標の設定と学習計画

第4回目の授業では、英語学習の目標設定の導入を行った。学生には第1回目と第2回目の授業で記入したワークシート(1)と(2)を返却した。そして、以下の学習計画に関する質問項目を記したワークシートを新たに配布した(ワークシート(4)参照)。

- (4-1) 長期目標 (*初回授業で記入済み)
=>(1-5) 英語を使ってどんなことをしてみたいですか。
- (4-2) 目標を達成するために必要なこと・もの(*第2回目の授業で記入済み)
=>(2-2) そのために必要なこと・ものは何だと思えますか。
- (4-3) 短期目標① (*7月中旬までの目標)：
- (4-4) 学習計画：(a) 何を(教材)、(b) どのように(やり方)、(c) どのくらい(量・頻度)(d) どこで(場所)、(e) いつまで(期間)

第3回目の授業までは「目標」という言葉を敢えて使用しなかったが、ここで初めて(4-1)「長期目標」や(4-3)「短期目標」の用語を用い、第1回目の記入内容との関連を視覚的にも明示した(下線部参照)。同様に(4-2)「目標達成に必要なもの・こと」についても、第2回目の授業時に記入済みであることを口頭でも伝えた。今回新たに加えられた(4-3)「短期目標」については、とりあえず7月中旬までと期間を定め、3ヵ月間の目標を考えさせた。その後で(4-4)「学習計画」を記入させ、より具体的な学習計画が立てられるよう、(a)「何を(教材)」、(b)「どのように(やり方)」、(c)「どのくらい(量・頻度)」、(d)「どこで(場所)」、(e)「いつまで(期間)」の5項目に細分化した。そして、学生にはクラス全体で共有したホワイトボードに書かれた学習方法(表2)も参考にしながら、自分の学習計画を立てるよう指示をした。

ここで目標設定に関するAさんとBさんの記入内容をみていく。

表3 ワークシート(4)の記入内容

	Aくん(クラスⅠ)	Bさん(クラスⅡ)
(4-1) 長期目標	外国人と友達になりたい。	接客を英語でできるくらい、英語が得意になりたい。
(4-2) そのために必要なもの・こと	ある程度、会話ができる英語力	<ul style="list-style-type: none"> 英語を好きになること。 洋画を観たり、洋楽を聴いて英語に接する。
(4-3) 短期目標(7月まで)	<ul style="list-style-type: none"> 簡単なフレーズを覚える。 ネット(スカイプ、SNS)で実際に外国人と話してみ、今の自分の英語力を測る。 	自分の行動を英語と結び付ける。
(4-4) 学習計画		
(a) 何を(教材)	<ul style="list-style-type: none"> 『フォレスト』、『ターゲット1900, 1000』など受験期に使った教材を見直す。 会話に重点を置きたいので、そういう教材を使う。 	辞書を使って、確認などをする。
(b) どのように(やり方)	教材を見直す	自分がしている行動と英語を結びつける。身振り手振りで覚える。
(c) どのくらい(量・頻度)	平日: 1~2時間 休日: 2~3時間	気付いた時に
(d) どこで(場所)	電車の中、図書館	その場で
(e) いつまで(期間)	3ヵ月間ほどやってみる。	単語が得意になるまで

まず初回授業で「外国人と友達になりたい」と書いていたAくんは、それをそのまま長期目標として定め、そのために必要なスキルについても「ある程度、会話ができる能力」と改めて記している。今回新たに加えられた項目である(4-3)「短期目標」については、(4-1)長期目標と(4-2)必要なスキルに関する記入内容を関連付けながら、「簡単なフレーズを覚える」、「ネット(スカイプ、SNS)で実際に外国人と話してみ、今の自分の英語力を測る」という2つの具体的な目標に落とし込んでいる。

Aくんの(4-4)学習計画についての記入をみると、ワークシート(1)と(2)提出時には「現在は問題集や映画を用いて学習を行っている」と記していたが、それに対する教員のフィードバック(「具体的にどんな問題集ですか?」)を踏まえ、ワークシート(4)では大学受験期に使用していた教材名を追記している(表4、下線部)。しかしながら、会話教材については特に明記されておらず、自分だけでは適したものが見つけれない可能性が示唆されている。また(4-4-b)「どのように(やり方)」についても、「教材を見直す」とのみ書いてあるに留まり具体性に欠けている。

一方Bさんのほうは、(4-1) 長期目標は第1回目の記入内容と同じだが、(4-2) 目標達成に必要なことについては、Aくん同様、ワークシート(1)と(2)の記入内容(「英語に接する」)に対する教員のフィードバック(「どうやって接しますか?」)に回答し、映画や洋楽など具体的な学習教材を記している(表4、下線部)。そして、(4-3) 短期目標では「自分の行動を英語と結びつける」と記入しているが、(4-4-c) 学習計画の「どのくらい(量・頻度)」の項目では「気付いた時に」と記し、自分に適した具体的な学習量や頻度がわからず決められない可能性を示している。

この時点では、個々の学生の学習計画の内容については教員の方では一切確認せず、学生には自分の学習計画を1週間遂行し、次の授業でグループのメンバーに結果報告をしてもらうとだけ伝えた。

【第5回目】英語学習の振り返り(1週間後)・修正

1週間後の授業では、以下の内容を記したワークシートを配布し、1週間の英語学習の振り返りをさせた(ワークシート(5)参照)。

■ 1週間の自分の学習を振り返り、以下の項目について回答しよう。

(5-1) 前回の授業で立てた学習計画をどの程度達成できましたか?

(当てはまる数値にマルを付けてみよう)

【0%/10%/20%/30%/40%/50%/60%/70%/80%/90%/100%】

(5-2a) 100%にマルを付けた方は、目標達成できた理由は何かありますか?

(5-2b) 100%以外にマルを付けた方は、達成できなかった理由は何かありますか?

(5-3) 学習計画の修正

*ワークシート(4)の学習計画①に戻り、(必要であれば)カラーペン等で加筆修正してみよう。

(5-4) 学習計画や学習方法について知りたいことや相談したいことはありますか?自由にお書きください。

振り返りをさせるにあたり(5-1)達成度の評価に加え、(5-2a)および(5-2b)のように目標達成できた・できなかった理由も併せて考えさせることで、自分の性格や生活習慣なども考慮に入れながら自分に合ったやり方を見つけ、継続学習につながることを期待した。さらに、(5-3)では学習計画を修正させる項目を設けた。自分の学習計画で修正したほうがよいと思われるところがあれば、ペンを用いて加筆修正するよう指示

した。修正作業を行う場合、書いたものを全て消して書き直しをさせることが多いが、後で振り返りをさせた時にも変更内容について自分で確認できるよう、またそれ以降にさらなる修正が必要になった場合に、どの程度の修正が自分にとって適当であるかを学生自身に把握させるため、敢えてペンを使用させた。また(5-4)では質問や相談を自由に記入できる項目を加え、学生一人ひとりが抱える問題や疑問を教員側でも把握し、必要に応じて適切なアドバイスを与えながら学生との協働的探究を目指した。

ここで、1週間の学習を終えたAさんとBさんの振り返りを見ていく(表4参照)。

表4 AさんとBさんの1週間後の学習の振り返り

	Aくん	Bさん
(5-1) 達成度	30%	50%
(5-2b) 目標達成できなかつた理由	<ul style="list-style-type: none"> • 単語だけでいいかなと思った。 • 単語をやっただけで達成感が満たされて、他のことをやるモチベーションが保てなかつた。 	<ul style="list-style-type: none"> • 気付いた時にすぐ調べて、とやっているうちに1日に調べた単語や文章などが多くなってしまい、覚えるという作業になってしまったりやる気が下がってしまうし、覚えるのも大変。回数を決めたほうが良い。
(5-3) 学習計画の修正	なし	あり ■「どのくらい(量・頻度)」のところに「1日3文(多すぎ注意)」と赤字で明記

まずAくんは、単語学習しか行わなかつたことを理由に達成度を30%として記入しているが、それに対して教員からは「単語学習だけでもしっかりできたことが素晴らしい！」と褒め言葉を与えた。ペニントン(2011)が指摘しているように、「継続学習の難しさ」が学習者オートノミー育成の問題の一つとされているため、Aくんがモチベーションを維持しながら学習を継続できるよう配慮した。一方、達成度が50%のBさんは、(5-2b)目標達成できなかつた理由の最後の一文に「回数を決めたほうが良い」と記し、実践に基づく気付きが行われている。さらに特筆すべき点は、最初の学習計画を立てた時点では「気づいたときに」と(5-3)学習計画の「どのくらい(量・頻度)」の項目で記入をしていたが、そこに「1日3文(多すぎ注意)」と赤字で追記している。1週間の実践を通してBさん自身が自分のペースで無理なく続けられる学習量と頻度を理解し、主体的に自学自習に取り組もうとする姿勢や意欲が示されているといえよう。

表5は、1週間後のクラス毎の省察内容の一部である。

表5 1週間後のクラスの振り返り (一部抜粋)

	クラス I	クラス II
(5-2b) 目標達成できなかった理由	<ul style="list-style-type: none"> • 怠けてしまった。曲は何がいいのか。意外と時間がかかる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 3つの内、2つは達成できた。洋楽とシャドーイングはできたが、日記をつけることができなかった。 • 三日坊主で終わってしまった。
(5-4) 質問・相談内容	記入無し	<ul style="list-style-type: none"> • リスニングの向上方法が知りたいです。 • 問題を解くための英語ではなく、実践的な英語を身につけるためにした方がよいことは何ですか。 • 大学生レベルの高校のワークのような教材はありますか？ • 先生がやっていた英語学習スタイルを教えてください。 • 習慣づけをするコツを教えてください。

クラス I では、計画通りに学習ができなかったことの反省の他、学習に適した教材を選ぶことに困難を感じる学生がいることが示されている。一方クラス II では、自分の学習計画に従って実践し、全てではないもののある程度達成できたと答えている。また、学習に関する質問や相談はクラス II の学生のみから寄せられ、その内容も効果的な学習方法・教材や継続学習のコツに関するものが圧倒的に多く、学習への意欲などが表れていると同時に、学習計画を立てる過程における個々の学生のニーズも明らかになった。そしてそれらのニーズに応えるため、その後の授業では、多読学習法、e-learning 教材、オンライン英語学習教材、映画（ロールプレイ）、学内で利用可能な英会話練習のできる English Chat Time の紹介、プレゼンテーション、辞書の使い方、アメリカ英語とイギリス英語の違いなど、さまざまな英語学習方法や教材などを紹介し、授業内で実践させた（詳細は図2参照）。

【第8回目】学習計画の中間報告

第8回目の授業で学習計画の中間報告をさせた。第5回目の授業で作成した学習計画を各自確認しながら、必要に応じてさらなる修正をさせた。

ここでAさんとBさんの学習計画をみってみる。まずAくんは、実践1週間後の時点では学習計画の修正を全く行わなかったが（表4参照）、第8回目の授業ではリスニング教材のところに「VOA（Voice of America）を使う」と赤字で明記している。第6回目以降の授業で紹介されたさまざまな英語学習方法を実践した上で、VOAをAくん自

身が選定している点は注目に値する。一方Bさんは、第5回目の授業の時点ですでに「1日3回」という学習量と頻度に関する頻度を自分で決め、それをその後も継続して実践できていたためか、それ以上の修正は見られなかった。

次にクラス毎の修正内容を見ていく。

表6 クラス毎の修正内容

	クラスⅠ	クラスⅡ
(5-3) 学習計画の修正 (何を)	<ul style="list-style-type: none"> 【修正前】 記入無し 【修正後】 書店にある本や、なければネットを使って。 【修正前】 記入無し 【修正後】 VOAを使ってみようと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 【修正前】 シャドーイング 【修正後】 シャドーイングをやめて、VOA／多読。 【修正前】 記入無し 【修正後】 多読／1日1回／空きコマを使って。

クラスⅠの学生の記入内容をみると、紹介された学習方法や教材などを試してはみるのが、膨大にあるものの中から自分に合ったものを選ぶことができない可能性があることが示されている。また、Aくん同様、VOAを選んだもう一名の学生は「VOAを使ってみようと思う」と加筆してはいるが、漠然とそう思っている可能性があり、まずは実践を促す必要性も示されている。一方クラスⅡは、授業内で紹介した多読の学習方法やVOAのネット教材などを自分の学習計画に取り入れ、学習頻度や場所なども含め具体的に修正し柔軟に対応していることが明らかとなった。

【第15回目】 英語学習計画の振り返りと履修プランの作成

終回授業で学生には自分の前期の学習の取り組みを振り返らせながら、4年間の英語学習・履修プランを立てさせた（ワークシート（6）参照）。図3は、AくんとBさんがそれぞれ作成したものである。

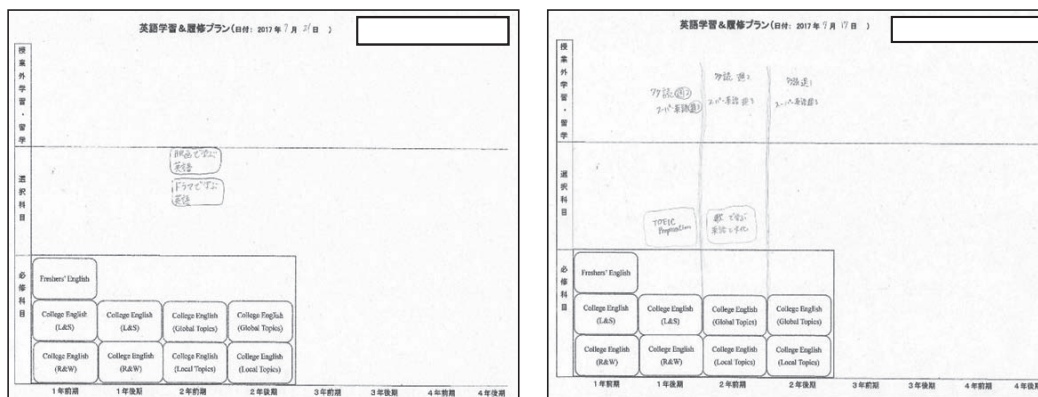


図3 4年間の学習・履修プラン (左：Aくん、右：Bさん)

まずAくんは必修科目に加え、2年次以上に開講されている選択科目の内、2科目（映画で学ぶ英語と文化、ドラマで学ぶ英語と文化）を履修する計画を立てているが、授業外学習については何も記入していない。ほぼ毎回の授業でさまざまな英語学習方法を紹介したが、Aくん自身がその学習方法を十分に理解し、自分の学習スタイルや英語学習以外の予定などと照らし合わせ、自分の学習方法を選択するにはもう少し時間が必要なのかもしれない。一方Bさんは選択科目に加え、1年次後期から2年次後期までの授業外学習として「多読を週2回、スーパー英語（e-learning教材）を週3回」と明記している。表4の通り、1週間後の学習の振り返りで「回数を決めること」で自分のペースで無理なく学習を継続できることに気付いていたBさんは、それを4年間の学習計画を立てる際にも反映させ、本実践を通して自分の学習スタイルやパターンへの理解を深め、自分に合った英語学習方法を確立しつつあるといえよう。無論、これを記入した時点での学生の学習意欲とその後の実態との間にずれが生じる可能性は否定できないが、少なくともこの時点ではBさんは自分の学習に責任を持ち、学習内容・方法を自ら考え決めることが出来ている点で、自律した学習者に近づいたと解釈できるであろう。

8. アンケート結果

終回授業で、英語学習の目標設定や学習計画に関するアンケートを実施した。表7は、クラス毎の結果である。

表7 英語学習の目標設定・学習計画に関するアンケート結果（単位：%）

	大いにそう思う		そう思う		そう思わない		全くそう思わない	
	クラス I	クラス II	クラス I	クラス II	クラス I	クラス II	クラス I	クラス II
(1) 自分の英語学習の目標を立てることができた。	6.0	9.1	76.4	90.9	17.6	0	0	0
(2) 自分の英語学習の計画を立てることができた。	17.6	9.1	64.8	81.8	17.6	9.1	0	0
(3) さまざまな英語学習方法を理解することができた。	17.6	27.3	76.5	68.2	5.9	4.5	0	0
(4) 自分に適した英語学習方法を見つけることができた。	5.9	4.5	52.9	81.8	41.2	13.7	0	0
(5) 自分に適した英語学習方法を現在実践している。	5.9	4.5	29.4	45.5	58.8	40.9	5.9	9.1

まず(1)目標設定に関しては、クラスIでは80%以上、クラスIIでは全受講生が「自分の学習目標を立てることができた」とし、同様に(2)学習計画についてもクラスI

では80%以上、クラスⅡでは90%以上が「自分の英語学習の目標を立てることができた」と回答している。初回授業で「目標」という言葉を敢えて使わず、まずは学生が英語を使ってやりたいことを明らかにさせたことで、自身と英語の関係性について具体化することができたのではないかと考える。そしてその後のワークシートを介した教員との対話により、学生自身が内省を繰り返しながらその関係性についてさらに掘り下げ、段階的に考える手助けになったと思われる。さらに、第4回目の授業で長期目標と結び付けさせ、さらに短期目標に絞り込んだことで、学生自身が「目標」、「必要なスキル」、「方法」の3つの関連性を意識しながら考えることができたといえる。しかしながら、クラスⅠでは目標設定と学習計画の両方について、同数の17.6%（3名）が「そう思わない」と回答し、目標や学習計画を立てることの難しさが明らかになり、教員の適切な足場かけが必要であることが明らかとなった。

次に、(3) 学習方法の理解に関しては、両クラスともにほぼ100%の学生が理解できたと回答している一方で、(4) 自分に適した学習方法を見つけることができたかどうか問われると、クラスⅠでは約4割の学生が「そう思わない」と回答し、前述の目標設定と学習計画に関する回答とも併せて考えると、クラスⅠの学生に対しては、個々の学生の英語自体の躓きや学習継続の阻害要因などを明らかにした上で、個別面談を実施し学生一人ひとりの状況に応じたアドバイスを行う必要性が示唆された。

最後の(5) 実践および継続学習に関しては、英語力の差異に関係なく実践に結びついていない学生が多く、モチベーションを維持・向上させながら、英語学習を継続できるような授業内の支援だけでなく、自学自習を促す学内での学習環境の整備の必要性も明らかとなった。特に本授業で紹介した英語学習方法は音声や映像、発声を伴うものが多いため、授業外でも発音練習のできるブースの設置などが必須であると考えられる。授業内での学習を授業外での自学自習に繋げられるよう、学内の語学施設の整備や語学自習スペースの設置などを具体的に検討したい。

9. まとめ

協働を核とした英語学習における学習者オートノミー育成を目指した本実践では、学生一人ひとりが自分の長期・短期の学習目標を主体的に考え、目標達成に必要なスキルなどを明らかにし、自分に適した学習方法や教材を選びながら学習計画を段階的に立てるというプロセスを重視した取り組みになった。そして、そのプロセスでは教員また学生同士の協働を通じて、個々の学生が自分の目標の実現を目指し、学習を計画・遂行し、学習計画に修正を加えながら、学習計画を立てるために必要なすべを自分のペースで学び、身につけることができたといえよう。

本稿で取り上げた2名の学生に関しては、まず英語に対する苦手意識と英語への憧れや学習意欲を併せ持つAくんは、当初は特にリスニング教材の知識が乏しいため具体的な方法を見つけることができないでいたが、教員やクラスメイトとの対話や授業内での

活動を通して自分に適した教材を見つけながら、徐々に自分の学習計画を立てることができた。またAくんが最初に立てた学習計画は量・頻度ともに十分に申し分ないかと思われたが、Aくん自身の省察にも見られた通り、Aくんにとっては適正な学習量ではなかったため、自己調整をしながら自分のペースで無理なく行える学習量や頻度を考え、学習習慣を身につけるような支援の必要性が示された。一方、Bさんは当初から「第2言語を使用した理想的な自身」を具体的にイメージできていたが、英語学習については全く行っておらず、行う予定もないと回答していた。しかし、目標設定・学習計画に関する一連の活動を通して、自ら考え、実践、省察することで、特に学習計画内の学習量に関する改善点に自ら気付くに至った。そして軌道修正を繰り返しながら自分に合った学習計画を立てることに成功し、Bさんが初回授業時に述べていた「第2言語を使用した理想的な自身」に向けて一歩前進したと同時に、自律した学習者としての成長も認められた。

英語力の差異に見られる特徴としては、クラスⅠは英語の教材を含む学習方法全般に関する知識が乏しいため、特に学習計画を立てるプロセスに於いて教員の支援が必要であることが示された一方で、クラスⅡでは学習のリソースに関する知識はある程度身につけているものの、それをどのように使用するか、その具体的な方法に関する知識や経験が十分でないことが明らかになった。しかしながら、クラスⅡの方が授業内で紹介した新しい学習方法や教材を自分の学習に柔軟に取り込み、自分の学習計画に反映させることのできる学生がクラスⅠよりも多く見られた。また両クラスに共通してみられた特徴として、学習方法の紹介に加え、授業内での実践の時間を十分に確保し自学自習へと結び付けていくことが重要であることが示された。

10. 今後の研究・実践課題

今回は学生と教員とのやりとりは主にワークシートを介したものであったが、今後は個人面談も実施することで、個々の学生が自分のペースで自律した学習者として継続学習ができるよう支援していく必要がある。また学生自身が自分に適した学習方法を探究しながら、具体的にどの技能の向上に役立つかなどメタ認知に関する明示的な指導も併せて行うことで、学習者の意識や気付きを高めることができ、前向きな学習態度を養うことにも繋がるのではないかと考える。しかしながら、本科目が学習方法の習得や練習のみに特化したものではなく、英語を学ぶ楽しさを再認識させることも含まれるため、トレーニングの要素が強すぎることをないようバランスも考慮に入れながら、より効果的な方法について検討していきたい。

目標設定に関しては、今回は長期目標と短期目標の2つのみであったが、今後は中期目標も含めた段階的目標設定を試みたいと考える。これまでの筆者自身の指導経験を振り返ると、3年次以上の学生は就職活動などを控えていることもあり、大学入学後間もない1年生とは異なる英語学習の目標や目的を持っていると感じる。また本学では必修

英語科目は2年次までであるため、2年次終了時を一区切りとし、それまでの「中期目標」を考えさせることで、より具体的な目標設定が可能になり、自分の描く将来像の実現に向けた目標設定にスムーズにつながっていくのではないだろうか。

本実践では学生の英語学習の目標が、大学入試対策からコミュニケーションにシフトし、それに伴い言語産出能力の向上を目指す学生が多いことが明らかになった。これからはインプット型の学習方法に加え、アウトプットやインターアクションをより重視した学習方法も紹介し実践させる必要があり、アプリの学習教材やオンライン英会話なども含め具体的な活用方法を検討したい。また授業内でもICTの積極的な活用が望まれると考える。

最後に今回の実践では、授業時数の関係もあり学習目標・学習計画に関する学生同士のやりとりは限られていた。今後は授業で紹介した学習方法の感想や学習を進める中で直面した悩みを学生同士で共有させ、同じような問題を抱える学生たちで協働的に問題解決に取り組ませることで、学び合いの機会を多く設けたいと思う。学生たちの英語の学習目標や学習計画はそれぞれ異なるが、お互いに切磋琢磨し目標の達成感を共有しながら、個々の学習者オートノミー育成をさらに支援していきたいと考える。

引用文献

- 小嶋英夫 (2007). 「英語科教員養成プログラムの研究開発－大学教育の新しいパラダイムに基づいて」 遠藤孝夫・福島裕敏 (編) 『教員養成学の誕生－弘前大学教育学部の挑戦』 (pp. 174-196). 東信堂.
- 中田賀之 (2016). 「『外国語学習動機づけ研究』再考－価値付けの概念」 *JACET Kansai Journal*, 18, 1-20.
- ペニントン和雅子 (2011). 「自律した学習者育成に向けた学習ストラテジー指導プログラムの効果－アクションリサーチの結果報告」 『西南学院大学言語教育センター紀要』, 1, 12-27.
- Borg, S., Birello, M., Civera, I., & Zanatta, T. (2014). The impact of teacher education on pre-service primary English language teachers. *ELT Research Papers*, 14,03. British Council.
Retrieved from <https://www.teachingenglish.org.uk/article/impact-teacher-education-pre-service-primary-english-language-teachers>
- Burrell, S., Miners, L., Nantz, K., & Torosyan, R. (2009). Getting started with portfolios: A vision for implementing reflection to enhance student learning. In Zubizarreta, J. (ed.). *The learning portfolio: Reflective practice for implementing student learning*. (pp. 85-96). San Francisco, CA: Jossey-Bass.

C.I.T.E. Learning Styles Inventory.

http://www.iidc.Indiana.edu/styles/iidc/defiles/INSTRC/TuesTips/learning_style_inventory.pdf

(2017年4月8日取得)

Di Leo, H. (1970). *Young children and their drawings*. New York: Brunner/Mazel.

Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2009). Motivation, language identities and the L2 self: Future research directions. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 350–356). Bristol: Multilingual Matters.

Kalaja, P., Dufva, H., & Alanen, R. (2013). Experimenting with visual narratives. In Barkhuizen, G. (Ed.). *Narrative research in applied linguistics* (pp. 105–131). Cambridge: Cambridge University Press.

Machover, K. (1949). *Personality projection in the drawing of the human figure*. Springfield, Illinois: Charles C. Thomas.

経済学部准教授

2018年2月28日

付 録

ワークシート(1)

【1st lesson】 Date : _____ Name : _____

(1-1) 英語学習歴を教えてください。 _____ 年 _____ カ月

(1-2) 海外渡航歴はありますか？ある場合は滞在期間と国名を教えてください。

(1-3) これまでどのように英語を学習してきましたか？

(1-4) 英語を動物に例えると何ですか？その理由も教えてください。

(1-5) 英語を使ってどのようなことがしてみたいですか？

ワークシート(2)

【2nd lesson】 Date : _____ Name : _____

■前回の最後の質問（英語を使ってどのようなことをしてみたいですか？）について

(2-1) そう思うようになったきっかけや出来事などがありますか？あれば具体的に教えてください。

(2-2) そうなるためには、どのようなことが必要になると思いますか？

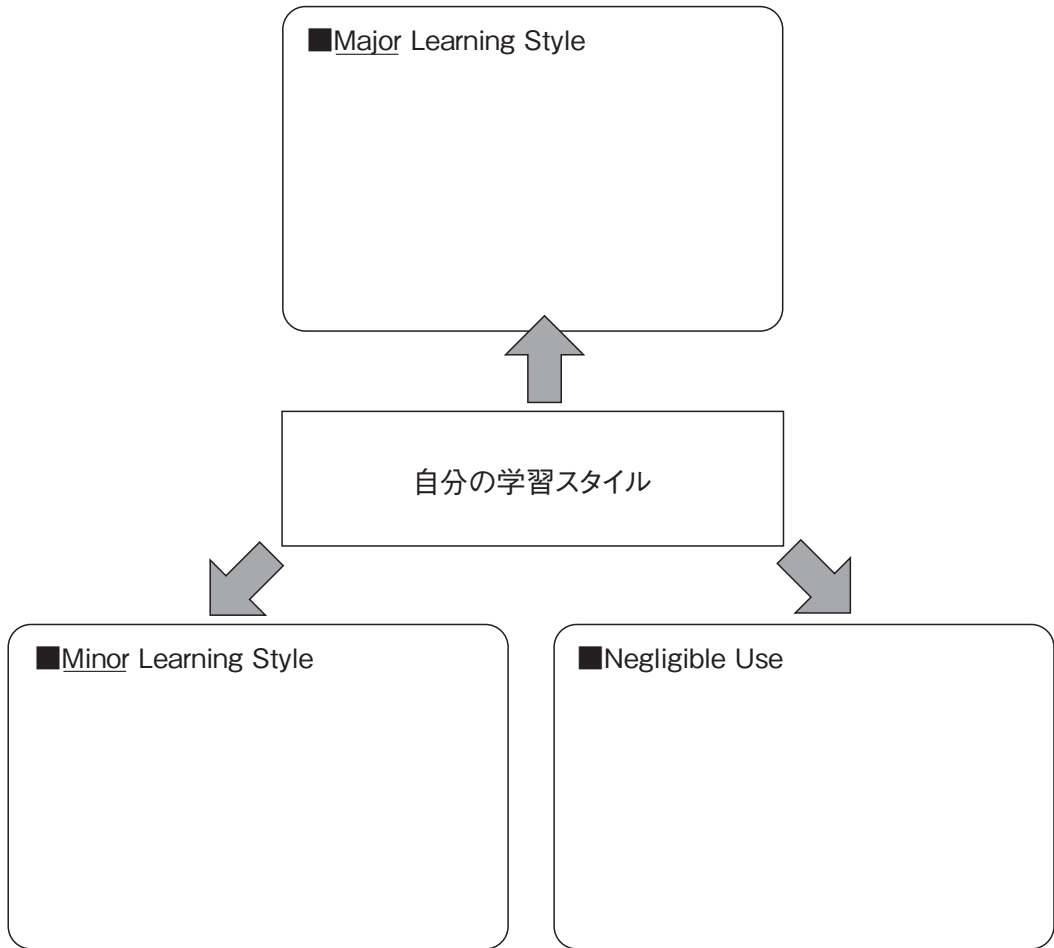
(2-3) その実現に向けて、現在行っていることはありますか？あれば具体的に教えてください。

(2-4) その実現に向けて、やり始めようとしていることはありますか？あれば具体的に教えてください。

ワークシート(3)

自分の学習スタイルを確認しよう！

【3rd lesson】 Date : _____ Name : _____



リフレクション (アンケート結果は自分の実際の学習スタイルと合致しているでしょうか?)

ワークシート(4)

自分の英語の学習目標と計画を立ててみよう！

【4th lesson】 Date : _____ Name : _____

■長期目標【初回授業で記入済み、ワークシート(1-5)参照】

■■目標を達成するために必要だと思うもの・こと

【第2回目の授業で記入済み、ワークシート(2-2)参照】

■■■短期目標①(*7月中旬までの目標) ==>考えてみよう！

■■■■学習計画①==>何を、どのように、どのくらい、どこで、いつまで勉強する？

何を (教材等)	どのように (やり方)	どのくらい (量・頻度)	どこで (場所)	いつまで (期間)

ワークシート(5)

1週間の自分の学習を振り返ってみよう！

【5th lesson】 Date : _____ Name : _____

■ 1週間の自分の学習を振り返り、以下の項目について回答しよう。

(5-1) 前回の授業で立てた学習計画をどの程度達成できましたか？

(当てはまる数値にマルを付けてみよう)

【0%／10%／20%／30%／40%／50%／60%／70%／80%／90%／100%】

(5-2a) 100%にマルを付けた方は、目標達成できた理由は何かありますか？

(5-2b) 100%以外にマルを付けた方は、達成できなかった理由は何かありますか？

(5-3) 学習計画の修正

*ワークシート(4)の学習計画①に戻り、(必要であれば)カラーペン等で加筆修正してみよう。

(5-4) 学習計画や学習方法について知りたいことや相談したいことはありますか？

自由にお書きください。

ワークシート(6)

英語学習 & 履修プラン(日付: 2017 年 月 日) 名前:

授業外学習・留学																
	選択科目															
必修科目	Freshers' English															
		College English (L&S)		College English (L&S)		College English (Global Topics)		College English (Global Topics)		College English (Local Topics)		College English (Local Topics)				
	College English (R&W)		College English (R&W)		College English (Local Topics)		College English (Local Topics)									
	1 年前期				1 年後期				2 年前期				2 年後期			
	3 年前期				3 年後期				4 年前期				4 年後期			
	3 年前期				3 年後期				4 年前期				4 年後期			

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITSUTSUJIGAOKA, CHOFU-SHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan